

光は西へ—奈文研へ

奈良にやってきたのは1973年4月。同期に入所した新人は6名、年齢には幅があった。文化庁の出入りから戻った金子裕之氏も含めた7名は、研修だけでなく、研究会をはじめいろいろな場面で、行動をともにしていた。

奈文研ではなんといっても発掘調査の思い出が中心となる。発掘は平城、藤原両地区とも経験した。入所するとまず、平城宮の研修現場に入る。しばらくは、いっしょに仕事をする発掘作業員の奈良弁を理解するのに必死だった。入所2年目になると大きな現場の発掘担当者をまかされる。自分は薬師寺西僧房の調査だった。古代の僧侶の生活が、火災により焼け落ちて、そのまま埋まっていた稀有な現場である。その頃の薬師寺は金堂の再建工事の真っ最中。本坊では昼に、我々現場班のためにきしめんを準備して頂いており、朝一番に奈文研側の人数を遅滞なく連絡するのも担当者の重要な役目だった。発掘現場は、多数経験した。担当者になったのは、平城宮、藤原宮以外では、大官大寺回廊、本薬師寺西塔などである。そうした遺跡の理解のためにも、日本だけでなく、広く東アジアに目を広げる必要を痛感し、勉強の範囲をひろげるきっかけとなった。

入所してまもなく、ある研究室に顔を出したら、無口な田中哲雄氏からいきなり「何センチ？」と聞かれた。サッカーシューズの寸法である。否応なく昼はグラウンドの生活が始まることになる。藤原へ移ってからはポジションはもっぱらキーパー、取って当たり前、取りこぼしたらぼろくそに野次が飛ぶ、という世界だ。仕事を終え、夕方になると一室に集まり、サッカー談義に興じるという毎日だった。

発掘以外では飛鳥資料館でいろいろな特別展に関わることができて、新しく目を開かされたことが多かった。両調査部での遺物整理、報告書作成に関わる思い出も尽きない。どの部署でも個性の強い先輩方がいた。また考古学だけでなく、建築史、文献史をはじめ、学際的な雰囲気の中かで多くを学んだ。有難いことと思っている。

東北の田舎から東京の大学へ、そして就職は奈良へ。時あたかも新幹線が西へ西へ延伸していたころで、そのキャッチフレーズ「光は西へ」は自分の奈文研での思い出に重なる。

(企画調整部 千田 剛道)

 退職者のひとこと



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長